

<実践報告>

同期型オンライン授業での模擬授業の実践 —Zoom を用いた英語科模擬授業における利点と課題—

青山拓実 信州大学学術研究院教育学系

Mock Teaching in a Zoom-based Synchronous Online Course:
Advantages and Challenges in the Context of ELT Methodology Module

AOYAMA Takumi: Institute of Education, Shinshu University

| | |
|---------------|---|
| 研究の目的 | Zoom を用いたオンライン模擬授業の実践を行い、課題を分析すること。 |
| キーワード | ICT 活用 オンライン型模擬授業 英語科教育法 |
| 実践の目的 | Zoom を用いた模擬授業の運用 |
| 実践者名 | 著者と同じ |
| 対象者 | 信州大学教育学部 3・4 年生 (16 名) |
| 実践期間 | 2020 年 4 月～8 月 |
| 実践研究の方法と経過 | 本実践は、2020 年度前期開講科目「英語科指導法演習 I」を、Zoom を用いた同期型オンライン授業の形式で実施した。第 1 回～第 5 回は講義・演習形式の授業を行い、第 6 回以降は受講生が模擬授業を Zoom 上で実施した。本報告では、模擬授業をオンライン上で行うことについて、受講生から収集したフィードバックを基にその利点と課題を分析し、議論する。 |
| 実践から得られた知見・提言 | 模擬授業を行った受講生から収集したフィードバックから、Zoom を用いた模擬授業では学習者のグループ活動やペア活動を記録することが容易であり、自身の授業分析を行う際により多くの情報が得られること等が利点として挙げられた。その反面、個々の学習者の反応が捉えにくくなってしまい、授業運営が難しいという点が課題として浮上した。 |

1. はじめに

2021年度に全面実施となる中学校学習指導要領(平成29年度告示,以下「新学習指導要領」という。)において,外国語科の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ,外国語による聞くこと,読むこと,話すこと,書くことの言語活動を通して,簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することとなっている(文部科学省2018)。また,コミュニケーションを行う目的や場面,状況などに応じた理解や表現,伝え合いを重視しており,英語科教員養成の場においても新学習指導要領を見据え,目的や場面,状況などのある言語活動を取り入れた英語指導のあり方を講義や実習を通して学生が身に着けることが急務となっている。信州大学教育学部でも,教職課程コアカリキュラム(文部科学省2017)に対応した英語科の指導法に関する科目(英語科指導法基礎,英語科授業学,英語科指導法演習Ⅰ・Ⅱ等)の中でこれらに関する指導を扱っており,本実践報告が取り上げる英語科指導法演習Ⅰは英語科指導法や授業づくりに関する基本的な知識を基に,模擬授業での指導実践を行うことが主な目的となっている。

しかしながら,新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のため,信州大学教育学部の2020年度前期の授業は原則としてオンラインで開講された。それを受け,実際の教室環境を意識した模擬授業を対面形式で実施することは困難となり,Zoomを用いた同期型オンライン授業の中で受講生による模擬授業を実施することとなった。本報告は,新たな試みとなるオンラインでの模擬授業について,その詳細ならびに受講生から得られたフィードバックをまとめ,今後の授業への示唆を提供することを目的とする。

2. 実践について

本報告で取り上げる英語科指導法演習Ⅰは,英語科教育法の関連科目として設定され,以下の達成目標を掲げている。

- 英語科教育の指導の理論や指導技術に基づいて,授業を構築し,模擬授業を行うことを通して,授業力の向上を目指す。
- 授業分析の方法を学び,模擬授業の省察を通して,授業を形式的に改善する技能を身に付ける。

2020年度の英語科指導法演習Ⅰでは,第1～5回を使い,英語科指導法,言語活動のあり方,新学習指導要領における指導と評価等についての講義と演習形式の授業を行った。その後,第6回では学生が小中学校における英語科指導計画を構築し,それに基づいた模擬授業を実践することを通して英語科指導法についての体験的で深い理解を得ることを目指した。模擬授業は第7～10回が1回目,第11回の授業振り返りを挟み,第12～15回で2回目の模擬授業を行った。英語科指導法演習Ⅰの達成目標に照らし合わせ,2回の模擬授業を通して英語教師として自らの授業実践を客観的に分析しながら振り返り,授業改善ならびに英語教師としての自己成長(英語学習や指導に対する信念等の捉え直し)に活か

すことを目指した。

2019年度の同科目では、学生による模擬授業を授業者となる学生と生徒役となる学生に分かれ、教室内で実施した。しかしながら、前述の通り2020年度の授業では実際の教室において対面形式で模擬授業を実施することには困難が伴うことから、受講生との検討の結果、オンラインで模擬授業を実施することとした。

3. 実践の詳細

3.1 模擬授業の実施方法とスケジュール

実践は、表1のようなスケジュールで行った。受講生の人数と授業時数の兼ね合いから、模擬授業を実施する授業回は表1に示されたタイムテーブルを基本として行い、授業のねらい等の説明時間を含め、100分の授業時間のうち1人あたり1回20～25分間の模擬授業とした。

個々の模擬授業に対するフィードバック(受講者から授業者へのコメント)は専用のGoogleフォームを通して送信する形を取り、そのデータを授業後に模擬授業を行った受講生へ共有する形を取った(フォームは図1を参照)。

図1 フィードバックフォーム

表1 模擬授業実施のスケジュール

| 授業回/時間 | 0-25分 | 25-50分 | 50-75分 | 75-100分 |
|--------------|--|--------|--------|---------|
| 第1～5回 | 英語科指導法, 新学習指導要領などに関する講義・演習 | | | |
| 第6回 | 第1回模擬授業に向けた準備 | | | |
| 第7回 | 学生A | 学生B | 学生C | 学生D |
| 第8回 | 学生E | 学生F | 学生G | 学生H |
| 第9回 | 学生I | 学生J | 学生K | 学生L |
| 第10回 | 学生M | 学生O | 学生P | 学生Q |
| 第11回 | 第1回模擬授業の振り返り・第2回模擬授業に向けた授業改善 | | | |
| 第12回 | 学生A | 学生B | 学生C | 学生D |
| 第13回 | 学生E | 学生F | 学生G | 学生H |
| 第14回 | 学生I | 学生J | 学生K | 学生L |
| 第15回 | 学生M | 学生O | 学生P | 学生Q |
| 課題 (レポート) | 模擬授業の実践と分析・改善を通じた英語教師としての自己成長プロセスについての振り返り | | | |

さらに、従来は授業前後の時間や研究室訪問などによって行うことが可能であった、授業担当教員との模擬授業についての相談の機会を提供するため、Google Classroom の Meet 上でのオフィスアワーを毎週設定し、授業外での教員と受講生とのやり取りの機会を確保した。

3.2 Zoom を用いた授業のセットアップ

前述の通り、新学習指導要領における中学校英語科の目標では、言語活動を通じた学びが重視されており、教師と ALT (T-T)、教師と生徒 (T-S)、生徒と生徒 (S-S)によるコミュニケーションの場面をオンライン上でも実現させることのできる環境を提供する必要がある。そのため、模擬授業を実施する受講生に対し、授業を行う時間帯のみホスト権限を付与することで、各自の取り入れる活動に合わせたブレイクアウトセッションの作成、組み合わせ等の管理を自由に行うことができるよう設定した。共同ホスト権限を受講生に割り振ることも検討したが、共同ホスト権限ではブレイクアウトセッション作成の設定はできないため、授業者が変わるタイミングでその都度ホスト権限を移動した。

また、ブレイクアウトルームを含めた授業の様子を授業担当教員(本報告の実践者)が観察したり、録画できるようにしたりするため、実践者は共同ホスト権限を設定した模擬授業記録用と模擬授業・運営観察用の PC を同時に接続し、授業運営と記録を同時に行った。模擬授業を行う受講生も各自 Zoom 上での様子を自身のデバイスに録画し、授業記録の作成や授業分析に活用した。録画された記録データは授業後に Google ドライブ上で共有し、受講生全員が確認できるようにした。

4. 実践の成果と振り返り

以上のような方法を用いて、16名の受講生による模擬授業を実施した。本セクションでは、実際に2回の模擬授業を行った受講生から収集したフィードバック(Google フォーム上で2020年9月に収集)を基に、模擬授業の教師役、受講者役それぞれの立場から本実践に見られた利点と改善点について紹介する(※以下、受講生とは英語科指導法演習Ⅰの受講生のこと、受講者とは模擬授業を生徒役として受講する学生のことを指す)。

4.1 受講生による振り返り

(1) 模擬授業を実践する立場から

はじめに、模擬授業を実践する立場から見た際の Zoom を用いることのメリットには、以下のようなものが挙げられた。

- ブレイクアウトルームに分かれた際に、それぞれの児童生徒の話す内容や理解のレベルをより正確に掴むことができた。それによって全体共有の内容が豊かになったと感じる。
- 対面の時よりグループワークの会話をはっきり聞くことができた。
- ブレイクアウトルームの個々の話や活動の様子を録画でき、振り返りに役立った。
- レコーディングが可能であったため、自分の言動だけでなく、生徒役の話や表情等も記録に残すことができたのが授業分析にとっても役立った。教室での録画では雑音も入

ってしまいますが、各ペアのやり取りにおいてその音声だけを記録できたのも良かった。

- 全員の反応を確かめながら授業ができた。
- パワーポイント等は、明瞭で(対面と)同じ距離感で共有できる。全グループの活動の様子を記録でき、省察しやすい。

模擬授業を実施する立場からの Zoom を用いた授業実践の優れた点は、グループワークやペアワークを行う際に学習者一人一人の発話やペアでの会話の様子を記録として残し、授業改善の手立てとするための分析に役立つという点であった。対面型の模擬授業でも複数人での活動を行う際にすべての発話や会話を記録に残したり、聞き取ったりすることは IC レコーダーをペアの数だけ用意するといった方法で行うことは可能ではあったが、実行可能性を考えると、多大なコストや労力が必要であった。各ブレイクアウトセッションのやり取りを記録として残すことで、これまで難しかった、学習者の発話の分析を通して自身の指導を振り返ることが容易になったという点は、オンラインで模擬授業を行うことの一つの利点であるということが言えるだろう。

反対に、以下のような点が Zoom を用いて模擬授業を行う際の障壁となっていた。

- 児童生徒の顔が画面に映っていない場合、理解度を測ることができず進めるのが難しいと感じた。現場では、生徒の反応によって言い方を変える等工夫ができると思うが、表情を読み取ることができないのが不便であった。
- 画面共有した際に全員の顔が見られなくなってしまい、反応を確認するのが難しかった。
- 画面共有をすると、授業参加者の顔を見てコミュニケーションを取りながら授業を進めていくことがより難しくなる。
- 全員に同じ情報が届いているか、不安になるときがある。
- 1人1人の授業参加者の表情が見えにくい。
- ペア活動の時間に一部屋ずつ入らなければならなかったり、部屋にいない間は会話が全く聞こえなかったりすることが残念だった。教室内であれば他のペアの様子も何となく把握ができてそれを授業に生かすこともできるため、生徒の現状から授業を組み立てていくことができない難しさがあった。
- ブレイクアウトルームの移動に時間がかかるため、効率よく机間指導を行うことはできなかった。また、生徒の反応を受けることに難しさを感じた。
- ブレイクアウトセッションの作り方(2回目は少し慣れた)。

一点目として、画面共有機能を使用してスライドや資料を共有していると、授業参加者の顔が見えなくなってしまい、T-S コミュニケーションがスムーズに行い難くなるということが分かった。対面式の授業であれば、教師は学習者の発話やつぶやき、表情の変化など、様々な情報を用いてやり取りや説明の理解を確認することによって適切な繰り返しや言い換えなどのストラテジーを用いて表現の導入などを進めていくことができる。しかしながら、Zoom の画面上では資料の提示中には学習者の様子を詳細に確認することができず、伝わっているか不安になるということが起こった。

二点目として、ブレイクアウトルームを用いたグループ活動やペア活動での場面において、一回の巡視では一つのグループやペアの様子しか観察することができず、全員の状況を確認したり、反応を受けたりすることができないという難点が挙げられた。確かに、前述の通り、記録を残して授業後の分析対象とするためにブレイクアウトルームでグループやペアの活動を行うことは非常に効率的であるが、リアルタイムで進捗状況を確認することはブレイクアウトルームでは難しいと考えられる。複数台のPCを用いて複数のブレイクアウトルームを同時に観察することは物理的には不可能ではないものの、学生の手持ちのデバイスを使うことなどの制約を考えると現実的ではなく、何らかの方法を検討することで、この点を改善したい。また、1回目の模擬授業では、Zoomをホストとして利用する経験が受講生にとってあまりなかったため、受講生向けにホストとしてZoomを利用するためのわかりやすいガイドを提供する必要があると考えた。

(2) 模擬授業を受ける立場から

次に、模擬授業を「生徒役」として受講する立場からのコメントの中で、メリットは以下のような点が挙げられた。

- ランダムにグループ分けをすることが可能となっていたので、毎回様々なメンバーと会話をすることができ、楽しかった。ふだんは周りを気にして話せない児童生徒も、ブレイクアウトルームに別れて1対1、または少人数で英語を話せることで、勇気が出るのではないかなと思った。
- グループの時間等で、普段あまり話さない人とも意見交換ができ、有意義であった。
- 知っている人とも話すことができ、みんなとコミュニケーションをとることができたため、社会的な繋がりが希薄化している環境下で人との繋がりを感じることができた。
- ブレイクアウトルームの作成がランダムであったことで、普段話さない人とペアやグループを組めたのがよかった。教室では移動等の制約があって隣同士や近くの人になってしまいがちだが、オンラインでは自由に組むことができるのが良かったと思う。
- 教師にしか見えない方法でやり取りができるので、周りの目を気にせず、気軽に質問等をしやすい。
- 教室の後ろでは教師の声が聞こえない、画面や板書が見えにくい等の問題があるが、それがなかった。グループ活動で机をくっつける時間の短縮、となりのグループの声が聞こえないので、自分のグループの話し合いに集中できた。

実際の教室で行う模擬授業では、グループ活動やペア活動を行う際のペア・グループ分けは授業運営や移動時間の短縮のためにできるだけ簡単な形で行うことが多い。例えば、前後・左右の学習者で組み換えをし、やり取りの活動をしたり、ディスカッションを行ったりするような状況である。しかしながら、Zoomでブレイクアウトセッションを用いる際にはランダムにグループやペアを作成することができるため、毎回異なる学習者同士でのやり取りが生まれたということが挙げられた。

また、ブレイクアウトルームに入ると、同じグループやペアになった以外の他の学習者

がないスペースでやり取りをすることとなるため、周りを気にすることなく話したり、質問したりすることができたというコメントも見られた。これは、模擬授業のみならず実際の教室での英語学習にも応用することができる視点であり、教室での言語不安 (Foreign Language Classroom Anxiety) が強く、なかなか自分のことについて話すことができない児童・生徒にとっては英語を用いてコミュニケーションを図ることに対する障壁を少なくする事ができる可能性があり、指導への応用を検討したい。

模擬授業の受講者として難しかった点としては以下のものがある。

- 回線の影響で声が遅れて届いたり、同時に話すとも聞こえなかったりすることで、会話がスムーズにできないという点で難しさを感じた。対面であればもっとテンポよく会話ができそうだったが、一つ一つ相手の発話を待って話すのが私にとっては違和感だった。
- パソコンの容量や Wi-Fi との接続関連でうまく繋がらなかったことがあった点。音声がか聞こえないときもあり、話したいのに話せないという状況になったことがある。
- 教師の音声がかスムーズに聞こえない時が少しあり、聞き取りにくい部分があった。
- 回線等に不備があると、一人だけ取り残されると強く感じる。
- ネットのつながりが悪く、ペアの人とコミュニケーションを取りにくいことがあった。
- グループ活動等で相手の様子を知ることが難しいためか、話を始めにくい。
- 内容理解が十分でないところ、もう一度説明がほしいところなどを、表情や仕草(首をかしげるなど)で伝えられず、すべきことが分からないところがあった。

最も多く挙げられたものは、ネットワークへの接続状況によって音声や映像の遅延が発生することによってコミュニケーションが円滑に進まなくなってしまうという点であった。実際に、模擬授業の途中で Wi-Fi の接続が解除されてしまい、授業の進行状況がわからない状態のまま途中から活動に参加するという場面が見られた。また、ターンテイキングにおける空白や重複といった言語コミュニケーションの特徴が対面式のものとオンライン形式のものには相違点があるのではないかと考えられ、今後詳細に分析する必要がある。

また、授業者が感じたデメリットと同じ点が受講者側からも挙げられた。授業者は学習者の反応が捉え難いという点を挙げたが、受講者は反対に、もう少し説明してほしい部分がある際にそれを伝えることが難しいという点を挙げた。

4.2 今後の Zoom を用いた授業に取り入れられる改善点

最後に、模擬授業を今後 Zoom で実施する際に気をつける必要がある点についても受講生からのフィードバックを得られた。

- 参加者それぞれが事前に使い方を練習しておくことで、本番での時間のロスやミスを減らすことができたらいいなと思った。ブレイクアウトルームの作り方や、共有の仕方、またレコーディングの仕方等、授業者も参加者も使い方を把握して、確実に記録を残したり、授業そのものに集中したりできるようにしたいと思った。
- 今後、オンライン授業を自分が行うことも増えていくと思うので機械の使い方に慣れる、オンライン授業について考えるいい機会であった。事前にブレイクアウトルームの操作

方法などをみんなで体験する機会等があればもっとスムーズに模擬授業を行えるかもしれないと考える。

- 資料が見えていたらいいねのボタンを押す、見えない時は〇〇を押す等、事前にクラス独自のルールを設けておくと、少しはスムーズに行くのではないかと思った。
- 基本的に全員が顔出しにすることで、通常授業のように、お互いに理解度等を確認しながら進めることが可能になると感じた。
- 運営については、こちらが授業しやすいように工夫して下さっていたと感じたため、改善点はあまり思いつかない。

まず、Zoom や機器の操作方法について事前に学ぶ必要があるという点が挙げられる。受講生は全員、2020 年度前期の他の授業についても Zoom を用いて受講しており、Zoom を受講者として用いることに関しては不安な点は見受けられなかった。しかしながら、Zoom をホスト側の立場として用いることはほとんどの受講生にとって初めての体験であり、ブレイクアウトルームの作成や資料の共有、ビデオの録画方法などについて初回の模擬授業では戸惑う一面も見られた。そのため、今後の Zoom を用いた模擬授業では、ホスト用の操作方法を事前に周知し、場合によっては一度操作を体験する機会を設ける必要があると考える。

また、模擬授業を進める上での共通のルールを設け、意思表示の方法やビデオ・音声の ON/OFF 設定などについて統一した基本方針を決めておくことで、スムーズな授業進行をすることが期待できる。受講生からは、模擬授業をしやすい工夫があったとの好意的なコメントもあったため、今回の Zoom を用いた模擬授業は受講生からも概ね良好な評価を得たと言える。

5. おわりに

本報告では、2020 年度前期に開講された英語科指導法演習 I 内で行った、Zoom を用いたオンライン・同期型模擬授業の取り組みを報告し、受講生より得られたフィードバックを基にその利点と課題について議論した。当初は対面型授業を実施することが難しい状況下での代替手段として開始したオンラインでの模擬授業であったが、実施後のフィードバックによれば、これまでに行ってきた対面形式の模擬授業では難しかったことがオンライン形式では可能となった部分があったこと等、単なる代替手段ではなく、これまでの方式の欠点を補完する手段としても機能していることが明らかとなった。その反面、対面形式の模擬授業では容易に行うことができていたことが、オンライン形式では難しくなるという点も見られた。今後、Zoom をはじめとしたオンラインツールのアップデートによる利便性の向上へ期待しつつ、授業実施上の工夫により課題としてあげられた点の具体的な解決策の検討を行いながら、オンライン形式での模擬授業の可能性を引き続き模索したい。

文献

文部科学省, 2017, 教職課程コアカリキュラム, https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf (accessed 2020.09)

文部科学省, 2018, 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編, 開隆堂出版, 東京

(2020 年 9 月 25 日 受付)